

## 来賓挨拶

国土交通省水管理・国土保全局  
砂防部長 南 哲行氏



皆さま、こんにちは。本当に石井知事をはじめ、今日、ご来場の皆さまには日ごろから国土交通省のいろんな施策に対しご支援をいただきまして、心から感謝を申し上げます。

この立山におきまして、砂防事業が始まってから、もう100年を過ぎようとしております。そういった中で、この富山の地におきまして、国内外の専門家の皆さまをお招きいたしまして、国際砂防フォーラム2011が盛大に開催されることにつきまして、心からお喜び申し上げます。

皆さまもご承知の通り、立山カルデラでは、いまから150年前、先ほど知事さんのごあいさつにもありましたが、安政5年の飛越大地震によりまして、鳶山が大崩壊しております。日本の三大崩れというのは、5つぐらいあるのですけれども、この鳶崩れは、必ず入っているということでございます。それほど日本を代表する崩れでございます。この鳶崩れにつきましては、幾度となく雨のたびに土砂を下流に出しまして、富山平野を常に土砂災害の危険に見舞わしておったというところでございます。

この荒廃した国土を再生するために、明治30年に砂防法ができております。その砂防法を根拠にして、明治39年に富山県民の悲願でございました砂防事業が、富山県により実施されております。しかしながら、先ほど知事のお話にありましたように、非常に急峻で費用もかかる、技術的にもかなり困難を極めたということで、大正15年に内務省の直轄に立山砂防が引き継がれております。初代の事務所長赤木正雄先生ですが、日本の砂防の父と言われるぐらい日本の近代砂防をつくり上げた方です。その先生が、いろんな当時の先端技術や日本の古来の技術も集めて、カルデラの基幹となる白岩砂防堰堤を施工いたし、それから、現在、立山トロッコとして親しまれております専用軌道もつくって、今日に至っております。

この立山では、色々な技術開発がされております。その砂防技術は、日本の古来の技術も入った、日本独特の技術であり、現在でも土砂災害に苦しんでいる世界の国々に移転をしております。例えば、アジアでは、フィリピン、インドネシア、ネパール、中南米では、ペルー、ホンジュラス、そして、グアテマラなどの、中南米地域の火山地域において多く行っております。それから、現在ではイランとか、ヨルダン。それから、エチオピアとか、中近東、アフリカ。そういった地域にも移転をしながら、広まっているところでございます。現在は、ヨーロッパにインタープリメントという組織がございますが、そこに立山砂防を説明し、日本の砂防技術がヨーロッパでも通用するのではないかということで、我々としては活動をしているところです。

話は、戻りますが、明治39年に始まりました立山の砂防事業につきましては、100年以上にわたる歴史を経て、ここ富山平野に大きな安全安心をもたらしたというふうに我々としては考えております。住みやすい県日本一といわれます富山県の発展に少なからず寄与してきております。これらは、ひとえに災害や難工事を乗り越えて、熱意と志を持って、砂防事業を推進されました地域の方々、それから工事関係者など、先人の皆さまのご努力によるものと確信しております。

平成 21 年 6 月、白岩砂防堰堤が、砂防施設として初めて国の重要文化財として指定されております。昭和 14 年に建設され、今なお、富山平野を土砂災害から守り続けている施設として、歴史的な価値や、近代砂防施設の一つの技術的到達点としての価値が、認められたものです。このことは、長い歴史の立山砂防が、地域の文化として評価、認識されたことに他なりません。現在、富山県をあげて世界遺産登録への取り組みが行われております。本日開催されます国際砂防フォーラムが、日本の砂防の取り組みを世界に発信するとともに、立山砂防の歴史的、文化的価値をアピールする機会になり、1 日も早い世界遺産の登録が達成されますことを心から祈念しております。

最後になりましたけれども、当フォーラムの開催に向けまして、ご尽力されました石井知事さんをはじめ、富山県の関係各位、そして本日お集まりの皆さま方に心から御礼を申し上げまして、私のあいさつといたします。今日は、本当におめでとうございます。